
導師オッショーの台本

高橋 A 全

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

導師オツシヨ一の台本

【Nコード】

N2001Y

【作者名】

高橋A全

【あらすじ】

少年が迷いこんでしまった世界は、『台本』によって支配されていた。誰もが自分専用の『台本』を持っていて、その通りに行動することを定められており、『台本』の『設定』から逃れることは許されなかった。なぜか『台本』を所持していない少年は、状況が何も分からないまま、ふたりの女の子と出会う。『台本』を所持している女の子たちは、少年が『魔王』の部下で、自分たちはその下僕である、と一方的に説明すると、少年と三人での共同生活を始めてしまう。戸惑い、混乱する少年をよそに、『台本』通りに次々と

イベントが発生し、状況はどんどん変わっていく。そしてとうとう、『勇者』役の少年が、敵としてあらわれる。『魔王』の部下と『勇者』、ふたりの少年は生命をかけて対決することになるのだった。

プロローグ（前書き）

この作品は、立花潮美さんの同名の小説を、許可を得て微修正し、投稿しているものです。

初投稿で、テストを兼ねています。おかしな部分がありましたも
ご容赦ください。

プロローグ

荒野を歩く、三つの人影があった。

一人は小柄な男であり、もう一人は長身の女である。三つ目の人影は、外見こそ人間の女に似ているが、どうやら人間ではないようである。

男が口を開いた。

「見わたすかぎり、岩や石ころばかりだね。どこまで続いてるんだろっ」

若い声である。むしろ少年と呼んだほうが、ふさわしいかもしれない。

「しばらく続くわ。だが、この先には緑豊かな大地が広がっているはずよ」

そう答えた女の声も若い。女は背が高いので少年より年上に見えるが、実際の年齢は、ほとんど変わらないようである。

そのふたりの腰には、剣があった。どこか重たそうにしている少年に対して、少女はそれを微塵も感じさせない足取りをたもっていた。

おそらく、少女のほうが剣の腕は立つ、と見てまちがないのだろう。

「ねえ、本当にこの方向で合ってるのかなあ」

情けない声を出した少年を見て、少女は軽く眉をひそめると、三つ目の存在を見た。

「はい、間違いございません。この先に噂の魔法使いが住んでいるはずですよ、勇者さま」

どうやら、三つ目の存在は人語を解するようである。

「その呼びかた、やめて欲しいんだけどなあ。ぼく、勇者じゃないし」

少年は情けない声を出したが、少女はそれを無視して存在に話し

かけた。

「その魔法使いは、腕が立つのか？」

「噂ではそうでございます、お嬢さま。なんでも、あの八部衆に匹敵するとか」

「眉唾物ね」

少女は吐き捨てたが、存在は気を悪くした様子もない。少年が困った感じで訊いた。

「その魔法使いさん、名前はなんていうの？」

「『フリードリヒ・アレクサンデル・ライゼンブルグ』と聞きおよんでおります、勇者さま。なんでも『全てが死に絶える永久氷土の守護神』のふたつ名を持つとか」

「はっはっは。すごいなあ。名前だけで強そうだね」

少年はのんきに笑ったが、少女は顔も声も不機嫌になった。

「爵位も持たぬ輩が、ふたつ名などと、百年は早い。許せぬな」

「まあまあ、いいじゃない。とにかく、会うだけ会ってみようよ」
頭から湯気を出している少女をなだめると、少年は先頭に立って歩みを進めた。

第一章 この世界へようこそ

そして気がついたとき、少年は椅子に座っていたわけで。

あれ？

小首をひねった少年の視界に入ってきたのは、見慣れた教室の風景。

目下、六時間目の授業の真っ最中で、教卓の前にいるのは担任の数学教師だ。

何が起こったのかよく理解できてない少年に、唐突に声がかけられた。

「おい、一戸。一戸為男」

ごく自然に、少年は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちよつと嫌な感じの笑みを浮かべながら訊く。

「問四の答えは？」

少年はあまり数学が得意ではなかったけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いていたのか。てっきり目を開けたまま寝ていたのか、と思ったよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、少年は赤面して椅子に座った。そして、

ここはどこ？ ぼくはだれ？

と、かなり真剣に自問自答をした。

少年だって莫迦ではないから、ここはいつもの高校の教室で、自

分は『一戸為男』であることは、そりゃあ痛いくらいによく分かっているのだ。ただ、ほんのちよっぴり違和感が頭のどこかをふわふわ漂っていて、それが気になって仕方がない。

さっきまで、別の場所に居たような気がするし、ずっと、ここに居たような気がする。

さっきまで、違う名前だった気がするし、ずっと、この名前だった気がする。

おかしいなあ。

と、少年はうんうん唸ってしばらく考え込んだ。のどに魚の小骨が刺さっているような、そんな嫌な感じが頭の奥深くに存在していて、なんともいえない気持ち悪さを生み出している。そんな少年を見て、隣の席の女子生徒が心配そうな声を出した。

「どうしたの？ 気分悪いの？」

囁くような小声で問われ、少年も同じような声で応えた。

「大丈夫。何でもないよ、『木村』さん」

そう、その通り。少年の隣にいるのは、まごうかたなき『木村』さんだった。

先生が言った通り、ぼくは寝てたのかな。

さしあたって、少年はそんな結論で落ち着くことにした。

やがて授業終了の鐘が鳴り、教室の中が騒がしくなった。

ぼんやりとした足取りで廊下に出た少年に、一人の男子生徒が声を掛けた。

「一戸、もう帰るのか？」

「ああ、うん。ぼくは帰宅部だからね」

「お前もいい加減に部活に入ればいいのに」

「いいよ。『加藤』みたいに運動神経よくないから」

「そうか、じゃあこれから部活だから。また明日な」

「さよなら」

会話はケチの付けようも無いほどに、よどみ無くかわされた。少

年の記憶が正しければ『加藤』はサッカー部だったはずである。

やっぱりぼくは一戸為男だ、まちがい無い。

九十九パーセントの確信を得て大きくうなずくと、少年は下駄箱へと足を向けた。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は学校を出ると、まっすぐ駅に向う。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自動改札に定期券を通して、電車に乗る。

「ぼくは『いちのへ ためお』だ」

少年は自宅の最寄り駅で降りて、再び改札を抜ける。

「ぼくは『いちのへ ためお』だよな……」

声を出して再確認。少年にとって、それは疑いの余地の無い確固たる現実、のほほ。

学校を出てから自宅に至るまでの道筋には、全く不都合が無かった。ここまでは迷うことなく『一戸為男』でいられたのに、駅を降りたところで初めて問題が発生したのだ。

一戸為男は、自分の家の鍵を持っている。そして、財布にそれが入っていることも知っている。家の住所も知っているし、さらには家の外見も知っている。だが、

親のことが思い出せない。

これは結構重大だぞ、と感じた為男はこめかみを軽くもんだ。為男だってまぎれもない人間であるから、両親がいるはずである。もしかしたら別の場所に住んでいる、とか、既に他界している、という可能性もあるけれども、それならそれで、為男自身がその事実に関する知識を持っていないといけないはず、なのだ。

ところが、その情報が、為男のなかからすっぽりと抜け落ちてしまっている。

学校で感じていたかすかな違和感が、為男の中でむくむくと首をもたげてきた。

なぜ、両親に関する情報だけ持つてないんだらう？

悩みつつ迷いつつも、為男はきれいに舗装された道を歩き、とある一軒家までたどりついた。門の前で立ち止まると、家全体を注意深くながめる。

まちがいないく、一戸為男が住んでいる家だ。

為男はしつこいほどに確認した。

この規模の一軒家であれば一人暮らしは有り得ない、という知識

この場合は常識といったほうがいいかもしれない　を持つて

いるがゆえに、為男は慎重に行動した。

仮にも同居人がいれば、失礼の無いように行動しなくてはいけないからだ。

為男は音を立てないようにそつと門を開けると、震える手で財布から鍵を取り出した。それを慎重に鍵穴に差しこみ、時計回りに回転させる。ちいさな金属音とともに開錠されたのを確認すると、為男はまるで泥棒のようにして屋内に体をすべりこませた。

生活感が漂ってるなあ。

それが第一印象。ただ、自分が住んでいる家なのだから、生活感があるのは当然のこと。

たたきの上で低く身をかがめたまま、為男は忙しく眼球を動かした。

目についたのは、靴箱の上にある花瓶と花。それは造花ではないし、しおれてもいない。とすると、この生花は誰かが準備した、ということになる。

自分は花など買うだろうか、と考え、為男は首を左右に振った。普通に考えるなら準備したのは女だらうな、と結論づける。

おそらく、ぼくは一人暮らしではないだらうけど……。

一番ありがちなのは母親が用意した、というものだけれど、それならそれで母親の知識を為男は持っているはずである。不思議な違

和感が飽和して、視線を落として考えこんだ為男の視界に、ある物が飛びこんできた。

靴。

それも二足あり、しかも見覚えがある。

学校指定の革靴。しかも女物だ。

そこまで認識した為男の額から、滝のように汗があふれはじめた。

「一戸為男には、姉や妹がいただろうか？」

いいえ、居ません。

「一戸為男には、近所に住んでいる親戚の女の子がいただろうか？」

いいえ、居ません。

「一戸為男には、家に呼べるような彼女、もしくは友達である女子生徒がいただろうか？」

いいえ、居ません。

いいえ、いいえ、いいえ。そんな情報は持っていません。

結論。

警告！ 有り得ない状況です！ ここは一戸為男の家ではない可能性があります！

為男の耳に、ブツブツ、という嫌な効果音が鳴り響く。直後におどろおどろしい極彩色で脳内に描かれたのは、『不法侵入』の四字。

家に入る前に呼び鈴を鳴らしておけばよかったのかもしれないが、今となつてはアフターフェスティバル、つまり後の祭り。仮にも、同じ学校に通う女子生徒の家に勝手に鍵を開けて音も無く入った、となれば、それはもう一大事、としか言いようが無い。

見つかる前に、逃げないといけないじゃないか！

と、為男は世界を救うべく立ち上がった勇者のように強く決意したが、

残念なことに遅かった。

何かを感じて顔を上げた為男の視界に飛びこんできたのは、一人の髪の長い女の子。

ブラウスに付いているリボンの色から一年生であるとわかり、為男の冷汗の量は急激に増大した。同年の知っている生徒ならまだ言いわけのしようもあるけれど、下級生となるとどうにもならないからだ。しかも、相手は見るからに結構性格のキツそうなキレイ系の女の子で、生半可な言いわけなど微塵も通用しそうに無い。

為男の動揺をよそに、その下級生の女の子は黙ってこちらに近づいてきた。

更にまずいことにもう一人、少し幼さの残るかわいい感じの別の女の子が現われ、短い髪を揺らしながら小走りにこちらに向かってくる。

逃げ出そうとして足の動かない為男の前にやってきた二人は、為男が何か言う前に、

その場にひざまずいた。

「お帰りなさいませ、『ご主人さま』」

「『ご主人』、お帰りなさいです」

それぞれ声音のちがう少女たちの台詞を聞きながら、為男はその場に立っているのが精一杯だった。

為男が、まるでさらし粉で漂白されたように脳内が真っ白になりつつも、

「ええと、うん、あれだ。……ただいま！」

と、ほがらかに言ったのは、さしあたってその場を取り繕おう、というせこい考えから。ところがどっこい、髪の短い方の女の子が、「にへへ」

と、笑って為男の学生鞆を取り上げるようにして持ち、もう一人の髪の長い女の子が、

「どっこそ」

と、うやうやしくスリッパを出してくれたので、為男は仕方なしにそれを履いてずかずかと家の中に入りこんでしまった。

まるで勝手知ったるいつもの我が家、のような感じで大きな部屋までたどりついてしまった為男は、

ああ、ここは居間かな、それともダイニングと呼んだほうがいいのか。

などと、どうでもよいことを考えて誤魔化していたが、それでも女の子に示されるままに角型の大きなテーブルに座りこみ、二人の女の子が相對するように座りこんでしまった後では、黙っているわけにもいかなかった。

為男は諦めて現実と向きあうと、少し考えてから訊いた。

「……それで？」

二人の女の子は、顔をちよつと見あわせてから応じた。

「『それで？』というのは？」

「二人は、ぼくのことを知ってるの？」

「そりゃ当然でしょ。『ご主人さま』だから」

と、なに言ってるのこのひと？ みたいな感じで髪の長い女の子

に言い返されたので、為男はかなりバツの悪そうな顔をしながら、

「いや、でもぼくはふたりのこと知らないんだけど」

と、真剣に言った後で、小さくため息をついた。二人の女の子は再び顔を見あわせて、

「ねえ落子、こういう『設定』だったっけ？」

「ええと、わたしはよく覚えてませんが」

「どうすんの？」

「と、とりあえず……自己紹介でもしておきますですか？」

などと、為男には意味不明な会話をしている。

それでもひそひそ話のあげくにふたりの意見が決まったらしくて、髪の長い方の女の子が、

「あたしは色部冷子、見ての通り高校一年生よ、ご主人さま」

と、あでやかに言いつつ、とても一年生とは思えない魅力的な足

を組みかえ、おとな顔負けの大きな胸をそらしてみせると、もう一人の髪の短い女の子は大きく拳手してから、

「わたしは逆井落子です！ 同じく一年生です、ご主人！」

と、まるで選手宣誓をする運動会の小学生みたいに、元気よく言っただけだ。

「……はあ」

と、為男がため息混じりにそうつぶやいたのも当然のこと。

これって自己紹介になってないんじゃないのかな、とか、いやいや、名前が分かっただけでもマシなのかな、とか内心でぼやき、手紙で『放課後、校舎裏で待ってます』と呼び出されたのに結局誰も来なかった、みたいな切ない気持ちになりながらも、為男は覚悟を決めて大事なことを訊いた。

「で、二人はぼくの何なの？」

それに対する答えは二人同時で、一片の迷いも感じられない口調。

「『下僕』です」

かくしてこの家で都合三度目となるため息をついた時、為男は決意した。

もうこうなつた以上、全部正直に言うしかない、と。

「ぶっちゃけて言ってしまうと、ぼくは状況が全然分からないんだ」

と、為男はまるで全面降伏した全滅寸前の部隊の指揮官のような口調で言うと、

「ぼくは何なんだろう」

と、自分でもかなり曖昧だなあ、と思われる質問をした。

これで『だからご主人さまです』などと返すのだけは許して欲しいなあ、などと為男が祈つたのも僅か数瞬のことで、二人は再び同時に答えた。

「『魔王』の最強の部下で、『四天王』の筆頭です」

しばし、沈黙。

虚を突かれた為男はあんぐりと口をあけたまま、冷子は形のよい眉を軽くひそめたまま、落子にはへへと笑ったまま、てくてくと時間が流れていった後で、

「まおう、つていうのは、『魔』の『王』なの?」と、為男は訊いた。

色部冷子がえらそうにうなずく。「そうよ」

「じゃ、ぼくは悪者の部下なの?」と、為男は顔をしかめた。

逆井落子がこくこくとうなずく。「ですです」

「つまり、ぼくも悪い人?」と、為男の顔がさらにけわしくなる。

返ってきたのは、二人並んでの春風のように爽やかな笑み。「はい、ものすごく!」

そして再び、沈黙。

沈黙を破るべく口火を切ったのは冷子で、

「ねえ、やっぱりおかしいよ。『設定』とちがうじゃん」と、断定すると時計を見て「もうこの時間なら日は落ちてるわね」と、独語しつづ、為男に向かって「その鏡を御覧になってください」と、名前の通り冷たく言い放った。

思考が停止したままの為男は、言われるがまま、自分の左にある大きな鏡を見た。

そこに映ったのは異形の存在。

牙。爪。蝙蝠のような翼。盛り上がった筋肉。

「夜は鏡の中に真の姿が現われるの。一応、人らしい形はしてますでしょ?」

と、色部冷子がくふふつ、と笑った。

逆井落子はちよつと困ったような、嬉しいような、不思議な顔で

為男を見ていた。

第二章 みんなのやくそく——（ 1 ）

そして、一戸為男は驚いた。

何が驚いたって、鏡に映った自分が化け物の姿をしているのに『ああ、そういうものなのか』と、なんとなく納得して思わずうなずきかけてしまったからだ。それでも、

もしかしたら鏡に細工がしてあるんじゃないか？

と、疑いつつ、腕を上げたり下げたり首を左右に振ってみたり、鏡の中の化け物が左右が逆なだけで、自分と全く同じ行動を取ることに流石にちよつと腹を立てはじめたとき、色部冷子がとなりでにへへ、と笑っている逆井落子を誘って、為男の後ろに回りこんだ。

それはつまり為男ともども鏡に映ろう、という作戦で、鏡の中の化け物の数が三匹に増えた時、為男は無条件降伏を受諾した。

「……どうやら、本当にそうらしいね」

と、うなだれた為男を見て、冷子は鏡に映っている黒い羽ごと背筋をそらすと、

「ご主人さま、『台本』読んでいらつしやらないでしょ？」

と、あきれた口調で言った。それに対して為男は、

「『台本』って、何なの？」

と、訊くは一時の恥、訊かぬは一生の恥、とばかりに、悟りを開いた高僧のような口調で言い返したが、そこで返ってきた反応は為男の想定の外にあつた。

「嘘！ 『台本』のことすら御存じ無いの？」

「ああ、わたしよりもさらに上の人がいるなんて……」

鏡に映る尖った尻尾を嬉しそうに左右に振りつつ、まさに春爛漫、といった感じの落子のハートを、斜め左後ろから体ごとぶっ飛ばしながら、寒風を身にまとう冷子が言った。

「あんたは台本読んでない、っていうか読んでも忘れてるだけでしょ」

「ああっ！ 冷ちゃんひどいい！」

うるうる、と目を潤ませた落子を無視して、ぶるぶる、と胸を振るわせた冷子は、

「悪いんだけど、はつきりさせたいの。ご主人さま、冗談をおっしゃってるの？ それとも、本当のことをお話されているのかしら？」

と、生活指導の女教師のような口調で問い詰めてきた。

ああ、キレイな子に敬語で怒られるのも、そんなに悪くないなあ。

などと、為男は少々の外れなことを考えつつ、

「知らない。知らないんだ。だから、分かるように話して欲しいなあ」

と、懇願するような目つきで申し開きをした。

二人の女の子は驚いたような戸惑ったような顔を見合わせた後で、「あのですね、あたしたちは下僕なんですけど」と、冷子が細い眉をひそめた。

「らしいね」

「ご主人の命令には絶対に従いますです」と、落子が丸い目で見つめた。

「なるほど」

「あたしたちにお願ひするのとか、やめていただけませんか？」と、再び冷子。

「はあ？」

ここで色部冷子は敬語を使うことを諦めたらしい。

「だから下僕なのよ。わかる？ お願ひしないで、命令して欲しいんだけど。こっちがやりづらいのよね」

「そう、なんだ」

為男はうんうんうなつて腕組みをすると、しばし黙考した。

どうやらこの世界には『台本』なるものがあって、ものすごく大切なものらしい。だけど、それについてぼくは知識を持ってないので、どうしたらいいんだろう？

なんとかかして二人の女の子から聞き出す術はないのだろうか？

そこで何かが流星の如くきらめいて、為男は二人の目を交互に見ながら訊いた。

「ぼくの命令は、絶対？」

「はい、絶対です」

と、二人が同時に答えたのを聞くと、為雄は座りなおしてから命令した。

「なら、『台本』を見せてくれ……いや、見せろ！」

こんな感じでいいのかな、と手探り状態の為男に、冷子の厳しいカウンターが一閃。

「それは、できないわね」

「は？ 何で？ いま『絶対』って言ったじゃないか」

僅か三秒で前言を撤回され、温和な為男も少々非難がましい口調になったが、

「自分の『台本』を他人に見せるのは、『禁忌（タブー）』だから」と、冷子に返されてしまった。

これはまた随分と、小難しい単語が出てきたもんだなあ。

と、為男は呆然としつつも、これではならじ、と再度命令した。

「ええと……じゃあ、あれだ。『台本』に関する『禁忌』について、説明……しる？」

冷子は即答を避けると、隣のショートカットの同級生を見つめた。

「これは、セーフよね？」

「むうー。……まあ、『禁忌』はみんな知ってるはずですからあー」

為男は期待と不安の入り混じった目でふたりの女の子を見つめていたが、無言の相談の後、落子の方が口を開いた。

「『台本』は一人に一冊与えられていますですが、それぞれの『台本』はその人専用の特製で、一冊一冊内容がちがうです。なので、他人が読むといわゆるネタバレになってしまうので、『絶対に他人が見てはいけません』という厳しい決まりがありますですね。その『禁忌』を破ると、それはもうどかーんと、ビクリドッキリ

「できやいーんな、凄くドでかい大不幸が訪れるです、ってことになつてますです」

「……はあ」

長い説明の割にはよく分からなかったが、為男は落子の言葉の内容よりも、その真剣な表情を見て自分を納得させることにした。そんな主人の反応を見て、えっへん、と満足そうにしている落子に、為男は続きをうながした。

「で、他には？」

「ふえ？ 他には何もないですよ」

のほほんと答えてみせた落子を見て、為男はあきれながらも、

「いや、無いわけ無いよ。捨てるなとか汚すなとかはあるだろうし、あとは『台本』で決められたルールを破るな、みたいなものもあるんじゃないの？」と、食い下がって見たが、

「そんなこと、できっこないから大丈夫ですよ」と、笑顔で返されてしまった。

それはおかしいよ、と全身で表現している為男を見て、冷子が強く敵しい声を出した。

「大事なアイテムは、捨てたり壊したりできないでしょ？ それにルールは破れるようには造られていないのよ。だから、禁じる必要すらないの？ わかる？」

冷子の断定的な口調を聞いた為男は反論をあきらめた。実際に『台本』を所持して、『台本』の知識も持っている二人がこう言っている以上、本当のことと思えるから、ここで為男が抗議してもどうにもならないのだろう。

野球の審判に向かって、『どうしてストライク三つでアウトなんだ！ ストライク四つでもいいじゃないか！』と、抗議したつてどうにかなるものではない。つまりはそういうことだ。

そこで、為男は無駄な抵抗をやめて、具体的な話をすることにした。

「じゃあ、『台本』そのもの、について訊きたいんだけど」

主人の命令を受けた冷子は、ダブルエスプレッソを飲み干したよ
うな苦い声で応えた。

「初めに言っておくけど、答えられないことがほとんどになるわよ？ 『台本』を他人が読むな、っていう『禁忌』があるんだから、自分の『台本』を他人に読み聞かせるのもだめだ、っていうのくらは分かるわよね？」

「ちよつとくらい、ダメなのかなあ」

「あのね、ご主人さまのために言っているのよ？ ここであたしがぺらぺら『台本』読み聞かせたらどうなると思うの？ ご主人さまがあたしの『台本』を読んだ、ってみなされてしまうのよ？ そしたらドでかい大不幸が訪れるのはご主人さまに対してなんだからね。それに、自分の未来の行動を他人に知られるなんて、恥ずかしいじゃない！」

「全くもって、ごもつともな指摘だ。思わず納得しまった為男は、とにかく当たりさわりの無いことを訊いてみることにした。」

「まあ『台本』っていうからには、台詞とかが書いてあるわけだよ
ね？ もしかして、今、二人が話している台詞も『台本』に書いてあるの？」

「いま、こうして話していることは『台本』に書いてないわね。でも、キャラの『設定』に『冷子は下僕として主人の命令に絶対従うこと』と、書かれているの」

「それで、ぼくの質問に答えてくれている、と」

「そういうことね」

満足そうに冷子が大きく頷いたが、為男にしてみれば訊きたいことは山ほどある。

「で、誰が書いたの？ この台本」

「知らないわ」

「二人の持つてる台本は、同じ人が書いたの？」

「おそらくは、ね。共同執筆、という可能性もあるから断言はできないけど」

「で、誰の為に書かれてるの？ この台本」

冷淡に質問に答えていた冷子が、初めて返答に窮した。

「……どういう、意味なのかしら？」

「つまり、ぼくたちはその『台本』通りに、まあ、ある意味、劇を演じているわけだよな」

思わず、と言った感じで、冷子は右手のひらを自らの頬にぴたりと当てた。

「そ、そういう見方もできると思うけど……」

「誰が見てるの？ 誰に見せてるの？ 何の為に？」

と、為男は矢継ぎ早に質問の矢を繰り出したが、

「それは、ちよつと……分からないわ」

と、冷子が初めて困惑の色を見せたので、為男も、

どうやら本当に知らないみたいだなあ。

との、結論を得た。

戸惑いを隠せない冷子に、為男はたたみかけるように連続攻撃。

「じゃあ、僕が『台本』を持ってないのはなぜ？」

「それは、何かのミスとか手違いとか……」

「他にも持っていない人、知ってる？」

ここで冷子は大きな胸の下で腕を組んで少し考えた後で、

「『雑魚』は持ってないみたいね」と、答えた。

「『雑魚』？」と、眉を軽くひそめた為男に、

「『雑魚キヤラ』の人間のことよ。いてもいなくてもどうでもいい人たち。あ、勿論、犬とか猫とかも台本は持ってないわね」と、冷子が乾いた声で説明する。

今度は為男の方が困惑した。右手で顔をぬぐったのは、意識しての動作ではない。『雑魚』という言葉いかたよりも、冷子が『雑魚キヤラ』という、人間と犬猫とを、まるで同じレベルのものとして扱うような、あっさりとした口調で言ったことが気にさわったのだ。

「あの、ご主人。ご気分でも悪いですか？」

空気をかき回すようにして落子に手を振ってみせると、為男は話

題を変えた。

第二章 みんなのやくそく——（ 2 ）

「ぼくが台本を持っていない、ということに関して、君らふたりはどう思ってるの？」

為男は逆井落子の丸い目をのぞきこむようにして訊いたが、

「あ、できれば名前で呼んで欲しいのです」

と、落子はまるで子犬のような瞳をきらきらさせてお願いしてきた。

為男は、つい十五分ほど前の記憶を脳内で反芻。

「ええと、色部さんに逆井さん、でいいんだっけ？」

「きゃいーん！ 下の名前で呼んで欲しいのです」

子犬ちゃんのご不満の様子である。仕方無く、為男は慎重にそれぞれの名前を呼んだ。

「……れいごさんに、おちごさん？」

「『さん』とか、要らないから」

冷子は、名前以上に冷たい視線で言った。

「でも、それはちよつとなあ」

「あたしたち、下僕っていう『設定』なのよ？ 『さん』とか付けられると、やりにくくって仕方無いのよね。無い方がいいんだけど」と、眼光するどい冷子に、

『設定』の問題じゃなくて、ポリシーの問題だ。

と、為男は渋面を浮かべた。

初対面の女の子、それが幾ら後輩だといっても、下の名前で呼ぶっていうのはちよつと恥ずかしい。ましてや呼び捨て、っていうのは、なんか妙に馴れ馴れしい限りで為男は困り果てた。

それでも下僕二人に真剣な目で懇願され、為男は仕方なしに承諾した。でもまあ、慣れないことには変わりなく、もの見事に言い終える前に嚙んでしまった。

「れいご、に、どじご？」

「それでいいわ」

と、冷子はにっこり笑って即答。二秒ほど遅れて落子は拳手して抗議の声。

「すとーっぷ！ すとーっぷ！ よくないですよくないです」

冷子は同僚の異議申し立てを意に介した様子もなく、さらりと言つてのけた。

「でも、やっぱりおかしいわね」

「何が？」

「ご主人さまが『台本』知らない、っていうことよ」

「なぜ？」

「知らないのなら、自分の名前も知らないはずなんだけど」

あ。言われてみれば。

「ここって、結構特殊な『設定』なのよね。地球という惑星の、日本という国の、東京という首都の近郊、そしてそこにある高等学校の普通科だし」

冷子は下僕とは思えない、容赦の無い視線と口調で主人を追い詰めた。めつつあった。

「それに、この家までたどりつけないと思うわ。定期券を持つてるから、降りるべき駅は分かっても、家の住所は知らないはずでしょ？」

「住所が学生証に書いてある可能性は？」

色部冷子は、思わず為男が目を見張ったほどの、高校一年生とは思えない妖艶な笑みを浮かべた。

「ご主人さま、学生証なんて持つてるんだ」

掌の上で転がされるような感を覚えつつ、為男は財布と定期入れを探った。

「……無い、みたいだね」

「でしょうね。学生証を使うシーンが無いから、そんな小道具は用意されていないのよ」

「小道具、ねえ」

じゃあ、この目の前の机は大道具なのか？

と、為男は思った。それにこの家は？ 街は？ 駅は？ 電車は？ そして学校は？

為男はえいえい、と気合を入れた。ちよつとでも気を抜くと、注意がすぐに明後日の方向に飛んでいってしまう。まずは『台本』のことをはつきりさせなくてはいけない。

「他人の『台本』を読むのは『禁忌』なんだよね？」

主人の質問を受けて、当然です、とばかりに同時にうなずく冷子と落子。

「外見を見るのも駄目なの？」

それはどうでしょうね、と今度は同時に小首をかしげてみせるふたりの下僕。

「台本の外面だけでいいから、見せて欲しいんだけど？」

いい加減にして、と冷子だけが顔をしかめた。

「自分の立場をわきまえて欲しいんだけど。あたしたちに頼むのやめてよね」

「……『台本』の外見だけ見せるんだ、冷子。命令だぞ？」

「つまり、中身を読まないけど存在を確かめたい、という意味に与ればよろしいでしょうか、ご主人さま」

「そうだよ。もしかして外見を見れば、ぼくも『台本』について何かを思い出すかもしれないだろ？」

「それなら、『禁忌』に引つ掛からないかな……」

小声でつぶやきつつ、冷子は自分の鞆に手を伸ばした。

「はい、これ。触っちゃ駄目よ、ご主人さま」

冷子が為男の目の前に差し出してみせたもの。

予想外にも、その大きさは文庫本程度しかない。そして

「 白い本だね。表紙も裏表紙も背表紙も真っ白だ。せめて、題名か持ち主の名前からい書いてあるか、と思っただけ」

実物を見ても、為男は何も思い出すことができなかった。それでも念の為に訊く。

「ドジ子のは？」

「……あの、ご主人。本当にその名前ですか？」

「まずい？」

「ご主人さまに名前を付けていただくなんて、下僕として誉れなことだ、と思うわ」

冷子の意地悪な視線を受けて、落子は目をうるうるさせた。

「うつつ……それでいいです」

「見せてくれ、ドジ子」

と、わざわざ為男が名前を呼んだのは、そう呼ばれたときの、逆井落子の困ったような、怒ったような、そしてどこかちよっぴり嬉しそうな顔が少々気に入ってしまったからだ。

落子は為男の期待通りの表情を浮かべつつ、制服のポケットの中を探ると差し出した。

「はい、これです。ご主人」

ドジ子の台本も、同じように白い本。大きさも文庫本程度。だが、ただ一箇所だけ、冷子のもものと異なる点があった。

見間違えような無い、それは明らか違い。

この時、為男もその相違点に気付いていたのだが、むしろその小ささの方が気になったので、軽やかに流してしまった。

「この程度の小ささで、『設定』やら『台詞』やら、全部書いてあるの？」

主人のご下問に、下僕の二人が大きくうなずいてみせる。

「とすると、結構小さな字で、びっしりと？」

「そこはご想像にお任せするわね」

それ以上は言いたくない、というわけか。

とりあえず、為男はあきらめとともに納得した。

「ぼくが思い出せることは、何も無いなあ」

「あら、そう。困ったわね」

冷子はそう言って主人たる為男を見つめたが、困っているのは為男のほうである。

「仕方がないわね。『台本』無しでやっていく、しかないんじゃないかしら」

「でも、ぼく自身がどう振舞えばいいのか、も分からないのはなあ」「それはあたしたちに訊かれても困るわ。あたしの台本には、基本的にはあたしのことしか書かれていないから」

為男は腕を組むと、椅子ごと後ろに仰け反ってうんうんうなった。しばし考慮の後、

「せめて、ふたりはどういうキャラなのか教えてもらえないか？」と、提案。

「それって、自分の台本を読み聞かせるのと同じことじゃないのよ」と、拒否。

「じゃ、こうしよう。『二人が下僕として自分の立場をわきまえているかどうか』を確かめたい。二人とも、確認の為に自分の立場を説明してみせる。これならどう？」と、妥協案。

冷子の口元が、かすかに緩んだ。

「へえ、意外と頭の回転は悪くないんだ」

「命令だぞ。冷子からだ」

意地になっている為男を見た色部冷子は、くふふつ、と笑うと、
「あたしは一戸為男という仮の名を持つご主人さま、すなわち魔王四天王の筆頭、その下僕の色部冷子です。得意なのは攻撃魔法」と、大きな胸を突き出し気味に言った。

「へえ、魔法とか使えるんだ」

と、為男が楽しそうに笑っていられたのもここまでだった。

「ええ。そしてあたしはご主人さまの愛人で、毎晩お情けをちょうだいしています」

「……は？」

引きつる笑顔で為男は裏返った声を出した。

「『お情け』っていうのは、その……つまり……」

「それがあたしの努めですわ、ご・主・人・さ・ま」

と、艶っぽくウインクした冷子を見て、一戸為男は両手でTの形

を作って大声を出した。

「ストップ！ タンマ、ちょっとタンマ。これは、これだけは確認しておきたい。これは、その、大人向けのお芝居なのか？」

「つまり？」

「その、アダルトな、いわゆる十八歳未満禁止の話なの？」

「そんなの、聞いてないわよ」

「で、でも、それらしいこと言ったじゃないか」

「『お情け』の話？」

「そう。そうそう、それ！」

「あのね、この世界の舞台は二十一世紀初頭の日本なの。この時代の高校生だったら、それくらいバンバンしてるのが当たり前でしょ？」

その返答を聞いた為男は、まるで神父に助けを求める子羊のような目でもうひとりの下僕を見つめたが、落子は顔を赤らめてうつむくだけだった。そんな相方を冷子は容赦なくうながす。

「次、ドジ子の番よ」

為男に見つめられた逆井落子はモジモジしながら、

「あのう……わたしは一戸為男という仮の名を持つご主人、すなわち魔王四天王の筆頭の下僕、逆井落子です。得意なのは防御魔法です」と、小さな胸を抱え気味に言った。

為男は不安そうに作り笑いを浮かべていたが、落子はそれ以上何も言わない。しんぼう堪らん、そんな感じで為男は訊いた。

「で、ドジ子も、そ、そ、その、そうなの？」

落子は驚くほどの速さで手を小刻みに左右に振ってみせた。

「いえ、わたしはまだ、ご主人の『リュウアイ』をいただいております、はい」

それを聞いた冷子が、いよいよもって冷たく言い放つ。

「ちよっと、ウかんむり付いてるんじゃないの？ それは『チヨウアイ』って読むのよ」

そして、一同しばし沈黙。

ああ、台本には『寵愛』って書いてあったのか。

と、事態を察知した為男は大きく頷くと、

「やっぱり、ドジ子でいいのかな」と、確認した。

「異議は無いわ」と、色部冷子は頷き、

「しくしく」と、逆井落子は泣いている。

悲嘆にくれる同僚から主人に視線を移すと、冷子がけだるそうに言った。

「で、するんでしょ？」

「な、何を？」

「そういうこと、女のあたしから言わせないでよ」

そう口を尖らせると、冷子は綺麗なウェーブのかかった茶色い髪をかき上げた。短めのブラウスの裾から見える素肌が、真珠のように白く輝いて為男の目に焼きつく。

「寝室は二階にあるから」と、冷子は席を蹴って立ち上がると「最初くらいムードを大切にしておね」と、眩くと振り返り「早くこっちに来てよ」と、不満そうな表情を浮かべて主人を見た。防戦一方の為男もいよいよ我慢できなくて、

「ちよつと待つてくれ！ 頼むから、『当たり前』みたいな言いかた止めてくれよ！ ぼくはこの家に入ってから知ったことばかりですごく混乱してるんだ！」

と、大声で怒鳴った。冷子を叱るため、というよりも、自分自身の戸惑いのために。

その結果、一戸為男の当惑は更に増強されてしまった。

「も……申し訳ありませんでした、ご主人さま」

と、震える声で色部冷子はその場にひざまずいたのだ。しかも震えているのは声だけではない。ふと気付くと、逆井落子も椅子から転がり落ちるようにしてその場に土下座している。こちらも体を震えさせ、わずかに見える顔は冷子同様に真っ青だった。

「お、おい。ふたりともどうしたんだよ」
冷子は答えない。

恐る恐る、といった体で落子が神妙に申し立てた。

「あ、あのですね、ご主人は怒ると体から『闘気』が出るです、はい……」

「『闘気』？ オーラみたいなものか？」

「は、はい。です。ご主人はわたしたちより圧倒的に『レベル』が高くて強いですので、ご主人の怒りの『闘気』を浴びると、その、下僕のわたしたちは……」

落子の声が掠れ始めたので、慌てて為男は深呼吸を繰り返した。

「違うんだ、怒ってない、怒ってないぞお、うんうん。……とりあえず、冷子、立てよ」

さっきまでの強気はどこへやら、ゆらゆらと立ち上がった色部冷子は幽鬼のようである。知らなかったこととはいえ、為男はいささかならず罪悪感を覚えた。

「何というか、あれだ。冷子、ちょっと自分の部屋行って、休んでこい」

「でも……」

と、紫色の唇が痙攣するように動くのを見て、為男は強く、優しく命じた。

「命令だから、休んでこい、冷子」

小さくうなずいた冷子がふらふらと居間を出て行くのを見届けると、為男は振り返った。

「ドジ子、お前も休むか？」

「あ、わたしの方は大丈夫ですけどです」と、落子は上目遣いで為男の顔色をうかがっている。

「そうか。大丈夫なら椅子に座ってくれ。もう少し訊きたいことが

あるんだ」

為男が笑ったのを見て、落子はびよこんと飛び上がるようにして立つと、スカートがしわにならないように注意深いそいそと椅子に座りこんで、にへへ、と笑った。

「訊きたいのは『設定』のことだけど……あ、そうだ、その前に。何も考えずに言っちゃったけど、二人とも自分の部屋はあるんですよ？」

「ありますです。一人に一部屋を使わせていただいていますです」と、どこか申しわけなさそうに言った落子を見て、為男は笑顔で応えた。

「大きな家だから、自由に使えばいいよ……じゃなくて、使うことを許可する」

「はいです！ キヤツホウ！」

にぱぱ、と笑った落子を見て、色々な意味で安心した為男は咳ばらいをひとつ。

「その、さっきの話を続きになるけど」と、ここで為男は自分の口調が怖くならないように注意しつつ訊いた。「必ず、『設定』の通りになるのか？」

「今、『台本』に無い台詞をお話しているように、そこそこ自由が利きますです」

「じゃあ、自由が利かない場合もあるの？」

「ありますです。それは、強制イベントです」

「強制イベントお？」

「その、ストーリーの根幹にかかわる大事なイベントです。それについては、自由はほぼ利きません」

ま、『台本』通りに進めるためにはそういうものも必要か。

為男は軽く納得しかけたが、慌てて頭を振った。

簡単に『強制』だというのが、それは自分の言動や行動の一切合切を支配される、ということではないのだろうか。それはちょっと怖すぎる。為男は落子の目を見て、

「強制と言うのは、どの程度の強制なの？」と、真剣な声を出したが、

「基本的には、体が勝手に動きますです」と、あっけらかんとした答えが返された。

「体が勝手に、って……じゃあ、台詞も？」

「はいですす」

為男は無意識の内に険しいものを顔に出してしまい、顔色をうかがっていた落子が子犬のように首をすくめた。為男はそれに気付かないで、

「強制ではないイベントもあるの？」

と、探るような声を出した。落子は三回続けて瞬きをした後で、縮めていた首を伸ばしてから、ちよこんと傾げると応じた。

「ふえ？ おっしやってっている意味がよく分かりませんが、まあ、何というか……強制じゃないイベントは、全部自由なイベントに当たると思えます」

「自由……ね」と、呟いた為男は乾いた唇を舐めつつ続けた。「じゃあ、その『自由』ってというのは、ぼくはどれくらい利くもんなの？」

「いま、ご主人が自由に振舞っている程度に、ですす」

それはひどく曖昧な言いかたであっただろうけれども、為男はなんとなく理解できた。

「なるほど。じゃあたとえば、この家の中ではある程度自由が利くのかな？」

「はいですす。ここでは起こらな……な、な、な、夏の海はさらさら」

この時、驚くほどの確に為男は落子の言いたいことを察知した。

「つまり、家の中で起こる強制イベントは無い、と」

「りりり〜 るるる〜」

一生懸命に誤魔化しているのを見ると、『家の中で強制イベントは起こらない』というのは、台本に書いてあることなので口にする

のは『禁忌』らしい。

「で、冷子のことだけど」

「れれれ〜 冷ちゃんが〜 どうかしました〜 ですか〜 ろろろ〜」

「もう歌わなくて、いいから」為男は手を振って落子の即興歌を止めさせると、迷った拳句に正面切って訊いた。「その、設定の通りに、あ……愛人関係にならないと駄目なのか？」

落子はもともと丸い目を、さらに丸くしてみせた。

「ご主人、冷ちゃんのこと嫌いですか？ 冷ちゃん、バインバインです。ボツ・キュツ・ボーン、です。ブルルンブルルンです」

「それはそうだけどさあ」

と、半笑いで答えてしまった為男は、脳内にむくむくと湧き上がってきた冷子のボデイルインを必死に追いはらいつつ言った。

「でも、会ったばかりじゃないか。それにそういう目的だけで、その、そういう関係になるのは、あれだと思う」

直後に為男が顔をしかめたのは、自分でも何を言っているのかわからない発言をしてしまった、という自覚があったせいだったけれども、落子の方は妙に納得したらしい。

「ご主人、意外と純情です。ビックリです」

にへへ、と落子が笑ったので、為男もそれに応えて、にへへと笑った。

ふたりで笑うと、何か妙に落ち着いてしまった。

まいったな、訊きたいことは山ほどあるんだけどな。

とにかく、気になることから訊いておこう、と為男は決めた。

「とりあえず。なんで、ぼくのこと『ご主人』って呼ぶの？」と、素直に訊くと、

「ご主人だからです」と、会った直後を思い出させるような答えを落子は返してきた。

為男としてはそれでは納得いかない部分が多々あったので、しつこく訊いた。

「それってほらさ、普通は知り合いの奥さんの旦那さんのことをそう呼ぶわけでしょ？ 『ねえねえ、お宅のご主人、で見かけたわよ』みたいな？」

「ですすね」

「なら、冷子みたいに『ご主人さま』でいいじゃないか」

「かぶるから、らしいです」

「……は？」

「冷ちゃんと呼びかたが同じだと、どっちが喋ってるか分からないから、主人に対する呼びかたをふたりで別にする、ってです」

「ぼくは十二分に区別付いてるけど、それは誰に対してなの？」

「さあ、誰でしょー、です」

しばし、むうー、と落子はうなって考え込んでいたが、急にぴよこん、と立ち上がった。

「あ、わたし冷ちゃんの様子見てきますです」

どうも考えこむのは苦手らしいな、と察知した為男は鷹揚にうなずいてみせた。

「……そうしてくれ」

落子が小走りに居間のドアに駆け寄り、まさにノブに手を伸ばした瞬間、

「きゃいん！」と、急にあいたドアに激突した。

「あ、居たの？」と、おでこを押さえてうずくまった落子を横目で見て、冷子が言った。

「もう、いいのか？」と、為男が落子の様子を見つつ訊く。

「もう大丈夫よ」と、冷子はにこにこ笑い、

「わたしは大丈夫じゃないです」と、落子はしくしく泣いている。

すっかり元気を取り戻した色部冷子は、台所に向かうと無造作にエプロンを手に取った。

「何するの？」

「何、って？ 夕飯の準備に決まってるじゃない」

「あ、作ってくれるんだ」

急に空腹を思い出したように、おなかをさすりながら為男はうなずいた。

「今日はあたしが当番なのよ」と、冷子が説明し、
「明日はわたしです」と、落子が補足する。

「じゃ、ぼくの当番の日は……」と為男は確認しかけて、冷子の冷たい視線のシャワーを全身に浴びた。「……しなくて、いいのかな」
冷子は相変わらずの態度だったが、目元にわずかに笑みを浮かべていた。

「思ってたキャラと違うわね、随分と」

「それは、どういうこと？」

冷子が答えないので、為男は視線を落子に向けたが、こちらも返事は無い。

「二人がぼくをどういうキャラだと思っていたのか、訊いてもいいかなあ」と、言いかけて、『設定』を思い出した為男は口調を改めた。「説明しろ。命令だ」

困ったような二人を見つつ、為男は付け足した。

「『台本』に書いてないことならいいんだろ？ 会話とか、『設定』とかからはどんな性格が想像できたんだ？ あくまでも、下僕としての『類推』の範囲内で、のことだよ」

「……言ってもいいの？」

「もちろんさ」

「そう、ね。『溢れんばかりの欲望に忠実。乱暴。我儘。下僕を家畜のように扱う人』」

「それはひどいなあ」

「そして『絶倫』」

「ぜ、絶倫？」

しつこいようだけど、これって一般向けの話だよな。

と、色々な意味で興奮気味の為男の視線を受けて、落子が恥ずかしそうに答えた。

「あの、その、もし大人向けのエッチなお話でしたら、ここでその、

冷子ちゃんとのあれでこれでそれな展開も、きつと強制イベントな
んだろう、と思いますです」

ドジ子にしては妙に説得力のある台詞だな、と為男は感心した。

「ちよつと期待してたのに、残念ね」

くふふつ、と笑うと、為男の反応を待たずして冷子は台所へと消
えた。落子が手伝いますです、とあとを追い、為男の見えない所か
らはドジ子が居ると邪魔よ、とか、それはあんまりですしくしく、
とか、そんな感じの会話が漏れ聞こえてくる。

為男は座ったまま脱力して、天井をあおいだ。

「なんだか、なあ……」

少々危惧していた夕食の味は割とまともで、というか、ご飯にレ
トルトのカレーをかけただけなので不味いわけも無いんだろうけど、
それでもおなが一杯になると為男の体には一日分とは思えないほ
どの疲労が重くのしかかってきた。

「ごちそうさま」

「おそまつさまでした」

「もう、寝てもいいかな……じゃない、寝ることにする」

「どうぞ、ご主人さま。あ、そうだね。『強制』じゃないけど、一

応、台本に載ってるから言っておくわね」

「何を？」

「ええと、『もうわたしは体力の限界ですう。お願いですからあ、
少し休ませてえ』」

溢れんばかりの色気を出して言い終えると、

「じゃ、おやすみなさい」

と、冷子は食器を抱えてあっさり身を翻した。

スプーンを口にくわえたままの落子は、顔を真っ赤にしてうつむ
いていた。

為男は首をふりふり二階へと続く階段を上ると、ぐるり、と周囲

を見わたした。

二階には部屋が三つあって、その内の二つにはそれぞれ下僕の名前が付いたプレートが下がっている。為男は、何も付いてない部屋の扉を開けた。

机、椅子、本棚、クローゼット。そして、整えられたベッドがひとつ。

制服を脱ぎ捨てると、為男はそのままベッドの中に潜り込んだ。

心も体もくたくただった為男は、五分ともたずに夢の世界へと飛び込んだ。

第三章 魔王は強かった (1)

朝。

聞こえるのはスズメの鳴き声。カーテン越しに降り注ぐのは春のうららかな日差し。

それはいつそすがすがしい、とさえいえる朝だったけれども、戸為男はまるで敵地に潜入したスパイのように、目をぐるりぐるりと動かし、周囲を確認した。

「夢オチ、っていうことは、無いみたいだなあ……」

為男がぼやいたのも仕方がない。いつそ昨日のあれが、ユメやマボロシであったなら。

いや、そもそもこの世界が夢や幻で、ぼくは本当は……。

と、そこまで考えて、為男はベッドの上にむっくりと起き上がった。

「ぼくは、本当は……なんだったんだろう」

寝ぐせのついた頭に、Tシャツにパンツ一丁。そのままの姿で、為男は腕組みをしてしばし考え込んだ。

昨日は気がついたら教室に座っていて、当然のように『自分は戸為男である』と認識して、家に帰るまでにはそれでまちがいないと確信した。ところが、家の中では知らない事実ばかりを提示されてしまったのだ。

『主人』、『下僕』、『魔王』、『四天王』、

そして『台本』。

いったい、どうしたもののかなあ。

と、為男はうんうんうなった。特に気になる最大の問題は、下僕を自称する女の子ふたりとの共同生活（今まさに進行中）である。外見はまあいいとしても、中身がかなりアレな感じの女の子ふたり

である。いや、アレなのは『台本』の『設定』のせいかもしれないけど……。

不意に為男の部屋のドアがひらいて、

「あら、もう起きてたの、ご主人さま」

と、色部冷子が顔をのぞかせた。どうやら朝からシャワーを浴びたらしく、濡れた髪が白い肌にしっとり張り付いている。

「元氣そうね」

「いや、そうでもないよ……」

「でも、はちきれそうよ」

慌てて、為男は掛け布団で下半身を覆い隠した。

「これは生理現象だから」

意識しているのかしていないのか、冷子は濡れた髪をかきあげた。

「朝ごはんの用意、もうすぐできるらしいわ」

「そうか、わかったよ」

「ただし、今日の食事当番、ドジ子だから」

「……そうか、わかったよ」

料理をドジってないといいけどな、と祈りつつ、流石にこの格好のままだと、と思った為男は、起きた後でパジャマを着ると階下におりた。

出迎えたのは、どこまでも元氣のいい声。

「あ、ご主人、おはようです！」

「うん、おはよう……」

朝からテンションの高い逆井落子に弱々しく応えようと、朝食ができるまでの間に為男はシャワーを浴びた。汗と汚れと心の涙を洗い流すと、少しさっぱりとした気分になった。

どちらが用意したのか分からないが、脱衣所には新しい着替えが置いてある。

次からは、下着くらいは自分で用意しよう。

と、赤面しつつ制服を着た為男が居間に戻ると、満面の笑顔の落

子にむかえられた。

「朝ごはん、できてますですよ」

にへへ、と笑った落子を見て、為男は自分の予想通りの光景に心の中で嘆息した。

逆井落子の指には、数箇所の絆創膏。

机の上の食器の上にあるのは、正体不明の物体。

それでも冷子がわざわざ椅子を引いてくれたので、やむなくそこに座らざるを得なくなってしまった。為男がちよつと逡巡した後、「……これは？」と、おそろおそろ皿の上にあるものの正体を訊くと、

「ベーコンエッグです」と、小さい胸を張って落子が答えた。

一戸為男は、ベーコンエッグと称する物体を慎重に観察した。

まず、ベーコンが千切りである。そしてそれが卵と十分なほど混和されている。卵と思しき部分は焦げていて、全体が見事な濡れ落ち葉色を呈している。

更に目を引くのは付け合せのサラダ。見事なまでのレタスの千切り。

普通、レタスは包丁で切らずに、手でちぎるんじゃないのかな。

と、為男は真剣に考えた。まるでとんかつの付け合せのキャベツのように、皿に山盛りにされても困るのだけれど。

それでも為男は、さあさあ、どうぞどうぞ、と目をきらきらさせながら勧めてくる落子を見て、仕方なしに口に運んだ。

抜群のかたさを持つパサパサの卵と、カリカリになりすぎたベーコン。自分が食べているのはドライタイプのキャットフードかな、などと思いつつ、それでも落子の左手に火傷の跡まであるのを見て、為男は努力して口に運んだ。

冷子はベーコンエッグを一口で放棄すると、後は千切りレタスを無表情に口に運んでいる。そして落子は食パンをおもむろに手に取ったのだが……。

文明の利器バンザイ。

いくらドジ子といえども、ボタンを押すだけのトースターはどう
こうできるものではない。かくして、一番まともなのはトースト、
という見事な朝食ができあがった。

格闘の拳句にオレンジジュースで流し込んだ為男を、落子はじつ
と見つめていた。

「あの、やっぱりおいしくなかったですか？」と、探るような声を
出した落子に、

「いや、まあまあだったよ」と、為男は笑って応えた。

もつとも、冷子が容赦の無い態度を取っているので、落子も状況
を察しているだろう。少々気まずい感じの空気がただよった後で、
落子がしょんぼりと謝った。

「あの、朝ごはんだけで手間取ってしまい、お弁当を作れませんでした
です……」

ここで為男は主人の寛容さを示し、下僕をいたわる言葉を与えた。
「いや、購買部で色々買うのも楽しいから、別にお弁当はいらない
よ」

「そう、ですか」

ちよっぴりほっとしながらも、どこか残念そうな落子を見て、為
男も色々と安心した。

「どうせ今日はお弁当いらないでしょ」

意味不明の冷子のつぶやきを、為男は軽く流してしまった。

昨日初めて学校に居たくせに、行ったことも無い購買部の存在を
承知していて、色々楽しい、とか言っている自分は何なのだろう、
と考えていたからだった。

『魔王の四天王の筆頭』といっても、一戸為男も所詮は高校生で
ある。

朝食の後は登校することになるわけだが、ここで為男は少し迷っ
た。いくら電車通学とはいえ、三人でいるのを見られてもいいのか

な、と考えたからだ。

だが、冷子と落子が、

「下僕なんだから、同行して護衛するのは当然です」

と異口同音に言うのを聞いて、為男も仕方なくそれを認めた。正直な所、昨日は何も考えずに帰ってきてしまったが、学校への道順に少なからず不安があったというのも、ふたりの同行を認めた理由である。

乗り込んだ電車に揺られながら、為男は丁寧に周囲を観察した。

周囲にいるのはスーツ姿のサラリーマンや、制服姿の学生たち。

まあ、朝の電車内としては普通の光景だ。

でも『普通』というのは何なのだろう。何をもって『普通』とするのだろうか。

と、為男の中に唐突に疑問が浮かんだ。

もしも、為男が全く違う異世界の住人だったら、この光景を『普通』ではない、と思ったかもしれないのだ。

車輪のついた鉄の箱が電気力で人間を運ぶ、というのは冷静に考えればおかしなものかもしれないし、或いは『人間』という存在自体ですら、本来は違和感を覚えるべきものなのかもしれないのだ。人間にあらざるものがのしと歩き回っている世界や、機械の群れがほいほいとダンスを踊っている世界だって、そりゃあるだろうし。

自分が、この世界を『普通』だと考えている根拠は、いったい何なのか。

行き先を見失いつつあった為男の思考が停止したのは、落子が小さな手を顔の前で振ってみせたからだだった。ほぼ同じ構造を持つ制服を着た人（と思しき存在）たちと一緒に電車を降りると、為男は二人の下僕の後をのこのこと歩いて改札を出た。

忌まわしいことに、下車した駅から学校までの道順をしっかりと覚えていた一戸為男は、下駄箱で二人と別れると自分の教室に向か

った。昨日と同じ席に座ると、まっとうな生徒として過ごし始める。もちろん、為男は真面目に授業など聴く気は無かった。何せ家の中がアレなので、この教室内は一人で考えをまとめることのできる貴重な空間だ、と考えていたのだ。

まずは、為男自身がおかれている状況を整理するところから始めよう、と決意。

ここは『普通』の学校だよな。

と、思った為男はすぐに小さく舌打ちをした。何が『普通』とか考えるのは止めにしよう、と自分に約束する。『普通』の定義から考えるのは面倒くさいことこの上ないし、大体『魔王』や『四天王』がいる時点で、『普通』の学校でないのは明らかだった。

過去の記憶が無い上に、『台本』も持っていない一戸為男が存在することも十分異常なのかな、とも為男は考えた。もし、自分に中学校や小学校の記憶があつて、しかも両親や家族に関する記憶も十二分に与えられていたとしたら、自分はどうか考えただろうか。

下僕を自称するふたりの精神が異常である、という結論にたどりついたかもしれない。

と、苦笑したところで、為男は慄然とした。不意に、胸の奥に恐ろしい疑惑が首をもたげてきたからだ。

このぼくの状態そのものが、『台本』の作者の狙い通りなのではないだろうか？

もし過去の記憶があれば、為男は冷子と落子を異常者と決め付けて、下僕として受け容れなかったかもしれないのだ。あの二人を下僕として受け容れ易い精神状態にするべく、為男には不完全な情報しか与えられなかったのだ、としたら。

いや、それは違う。

と、為男は首を振った。

そもそも、為男に『台本』が与えられていないことこそがおかしいのであって、『台本』があれば、もっとすんなりとあのふたりを

受け容れられたのだ。もし自分に『台本』が与えられていれば、冷子を愛人として認めたのかな、などと考えている自分に気付き、為男は再び苦笑した。

為男だつて健全な青少年だから、色部冷子の制服の膨らみやその揺れ具合を思い出すと、甘酸っぱいものが下半身を中心としてこみ上げてきてしまう。おまけに、それは為男の手の届く所にあるらしいのだ。為男さえその気になれば、あんなことやそんなこともできそうな感じである。加えて、もう一人の下僕、逆井落子も状況次第では色々できそうな雰囲気があった。落子は冷子と正反対のプロポーションだけど、あれはあれで……

危ない方向に行きかけた為男の思考が、唐突に外部から停止させられた。

「おい、一戸。一戸為男」

ごく自然に、為男は返事をして立ち上がった。

「はい、何でしょうか先生」

教師が、ちよつと嫌な感じの笑みを浮かべながら言う。

「問四の答えは？」

為男はあまり数学が得意ではなかったけれども、黒板を見て懸命に頭の中で計算して、なんとか答えを導き出した。

「……四百三十七です」

「なんだ、聞いてたのか。てっきり目を開けたまま寝てたのか、と思つたよ」

教室のあちこちから笑い声が聞こえて、為男は赤面して椅子に座つた。

何かヘンだな、と小首を傾げながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2001y/>

導師オッショーの台本

2011年11月8日03時03分発行